

【中学校の部】

最優秀賞

「笑顔の秘密」

登米市立中田中学校 三年 佐々木 柚奈ささき ゆずな

「きれいな色だね！」曾祖母の塗り絵は線からはみ出しているけれど、完成作品の彩りには、なぜか心がひかれます。「ぴーちゃんは何歳？」「七十七歳」本当は九十三歳なのに、いつでも七十七歳。「じゃあ元氣だね」と私が言うと、祖母は自分の母親に「私と年が近いね」と語りかけます。認知症で何度も同じ会話が繰り返されるのに、それを楽しめるのが私の家族です。

曾祖母は様々な病気にかかり、何度も手術や入院の日々。左の大腿骨を折り、それでも積極的に地域の活動に参加していました。友達をたくさん作り、時には草取りも頑張っていました。父は、家の中に手すりや足もとを照らすライトをつけるなど、曾祖母が安全に過ごせるように気を配っていました。私が「ご飯だよ！」と呼ぶと、私に負けない大きな声で返事をし、「あらら、おいしそう。」と言って残さず食べてくれます。いつも陽気な笑顔に家族みんなの心が温かくなりました。

しかし、昨年秋、右の大腿骨も折り、ついに車椅子生活

になってしまいました。自分らしく好きな行動ができなくなると、何かを諦めたようにどんどん元氣がなくなり無表情になっていきました。不思議なことに住所と生年月日はすらすら言えるのに、私のことも「あんだ誰っしや？」と聞くようになったのです。深夜二時頃、台所で一人。ご飯を食べていた時はとてむびっくりしました。火を使ってなくてほっとしました。その後、高熱が続いて尿路感染症や誤嚥性肺炎になった時は、もう助からないのではないかと誰もが心配しました。絶食期間中は点滴のみで体はどんどん痩せ細って筋力が落ち、介護をする難しさも出て、家族は戸惑い、悩みながら曾祖母を介護施設にお願いすることを決意しました。

曾祖母は、私が幼い頃から毎日のように側にいてくれました。人形遊びの相手、ピアノ練習の聴き役、嬉しそうな笑顔がいつも目の前にありました。雨が降ると、外を見て、なぜか「雨降りお雨さん雲のかげ」と歌い出します。「私のことも忘れてしまうの？」と、曾祖母が遠くなるようで悲しくなりました。

それから、私たち家族は何度も施設に足を運び、会いに行っています。ある日、部屋のドアを開けると満面の笑顔で「来てくれたの。ありがとね」と涙を浮かべていました。私はなんでこんなにも涙の中に笑顔が輝いているのか不思議でした。別人のように心の元氣が顔に表れ、周囲の人を和ませていま

した。点滴をしていた時は、真っ白な色だったからか、「これは牛乳すか？」と問い返し、私たちは「さすがだね！ぴーちゃん、絶好調！」と、笑顔がこぼれました。

「ぴーちゃんは、カラオケでも人気者。会いに来てくれた人が多くてね。どんな人にも話しかけ、必ず『ありがとう』と自然な笑顔を見せているよ。元氣を取り戻しているよ。」祖母は曾祖母のことを気遣い、肌寒いときは毛布などを掛けながら手を温めるように包んでいました。私は、「たくさん困難を乗り越えてきたぴーちゃんには、やっぱり笑顔が似合うね。」と嬉しい気持ちを伝えました。

「ぴーちゃんの部屋」そこにはデイスリーブに通っていた時に贈られた七年分の誕生日の色紙と写真、自分で創った季節の飾り物があります。それを見ていて、私は曾祖母が多くなの人に心を開き、ふれあいを大切にしているのだとわかりました。そして、四季折々の変化を楽しむ思いや感謝の気持ちを抱ける豊かな心があるのだと気づきました。笑顔の秘密。それは、もちろん家族の絆や支え合いが土台ですが、曾祖母の心の中に「笑顔の種」があったからなのです。

高齢化社会の中、未来に向けて一人暮らしの老人や介護の問題。家族の在り方。病院・専門機関・施設との連携、地域との協力など、さまざまな課題が山積みです。しかし、私は曾祖母の生き方から、「あなたが大切だ！」という思いで人と

関わり、温かい声を掛け合うところに笑顔の光が射すのではないかと思いました。一生懸命生きていることを認め合うこと、立場や思いを分かち合うために歩み寄るつながり。一人一人の存在が尊く、そこにかげがえのない「人生」があり、愛しさがあることを忘れてはいけなないと思います。そして、みんなで生き抜くという絆を強めてほしいと願っています。

私は将来、医療関係の職業に就きたいと考えています。どんな仕事についても出会う人とのふれあいを大切にしていきます。そして、言葉にどのような気持ちを添えてコミュニケーションをとるべきなのか、関わりをどう築いていくかをしっかりと心に刻み、笑顔の花を咲かせられる人になりたいと思います。

「ぴーちゃん！困ったことも笑顔にできると教えてくれてありがとう！今度フルートで『雨降りお月さん』を聴かせてあげるね！」